

讃岐国府跡発掘調査 現地説明会が開催されました

香川県埋蔵文化財センターでは古代の県庁といえる讃岐国府の位置と実態を明らかにするため、平成21年度から讃岐国府跡探索事業に取り組んでいます。今年度は府中町本村にある古代寺院の開法寺跡の東側(開法寺東方地区)に約350㎡



▲2月10日に行われた現地説明会の様子

の調査区を設定して、8月末から発掘調査を行っています。



今年度の調査区では飛鳥時代から平安時代の建物跡や、土坑などが見つけられました。昨年度までの調査で、開法寺跡の東側には区画施設(南北約80m)があることがわかっており、今年度の調査区(35-1区)はこの区画施設の南西端に当たります。区画施設の内側では200年にわたり、規則的に配置された建物群が営まれ続けました。また、開法寺跡との境界部分には複数の溝が掘られており、区画施設の西側の溝は改修を繰り返しながら、長期間にわたって維持され

内間遺跡の柱穴から垣間見えたもの

東かがわ市町田にある内間遺跡は、国道11号大内白鳥バイパスの建設に先立ち平成26年度から断続的に調査してきました。最終年度の今回は遺跡西端付近を調査し、農業用水路の延長部分や古代・中世・近世の建物跡などを確認しました。中でも柱などを立てた「柱穴」は調査地全体に広がり、その数は千基に達します(写真①)。建物を建て替えるながら長く住み続けた結果でしょう。



▲柱穴の調査風景 写真②

これらはまず半分を掘り、断面で土の堆積を観察し、写真・図面などの記録後に掘りあげます(写真②)。柱穴の中には石や土器片が入っているものがありません。柱を支える「根石」(写真③)や固定する

「詰石」として石を底や下部に据えることは多いのですが、写真④では途中に石が入っています。これは柱を抜いた後の埋め戻しを行う中で石を入れたことを示すと考えられます。土器のかけら(写真⑤)も同様の行為とみられます。このことから、内間遺跡に住んでいた古の人々は、家を建て替える時にリサイクルできる柱を抜き、その穴の一部に石や土器片を入れる風習があったと推定できます。それは住み慣れた家への感謝のしるしだったのか、けじめの儀式だったのかは定かではありませんが、こうした行為の痕跡をたどりながら、昔の人の考えに一步でも迫ってみたいと思います。



▲柱穴が多数出た調査区(北から撮影)写真①



▲根石を持つ柱穴 写真③



▲途中で石の入った柱穴 写真④



▲土器片の入った柱穴 写真⑤

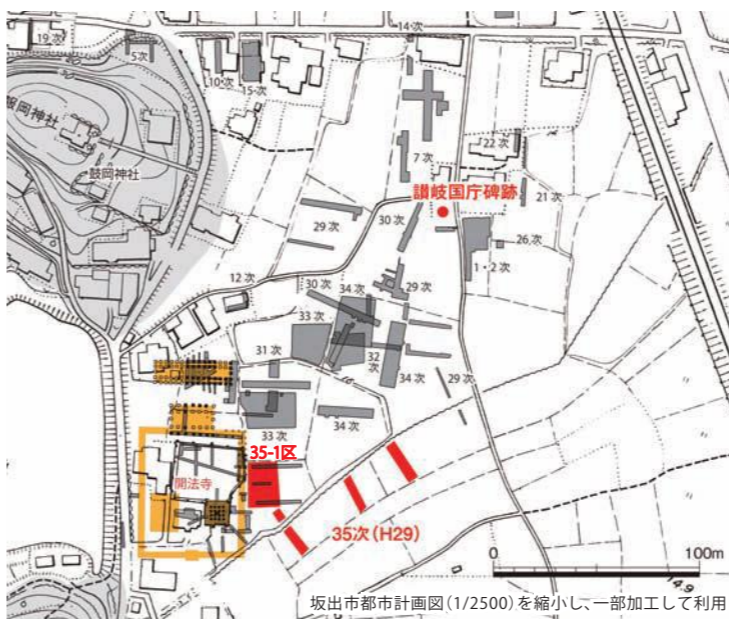
2018年2月

発行：香川県埋蔵文化財センター

〒762-0024
香川県坂出市府中町字南谷 5001-4
tel: 0877-48-2191 / fax: 0877-48-3249
HP: <http://www.pref.kagawa.lg.jp/maibun/>
E-mail: maibun@pref.kagawa.lg.jp



ていたことがわかりました。2月10日には調査の成果を実際に見ていただく現地説明会を開催しました。また、同日には隣接する開法寺跡発掘調査の現地説明会(坂出市教育委員会主催)も合同で行われました。あいにくの降雨で足元が悪いにもかかわらず、大勢の方々にご参加いただきました。



▲讃岐国府跡で発掘を行った場所

資料紹介 軒丸瓦



平成30年2月に軒丸瓦が寄贈されました。この瓦は『香川県史第13巻 資料編考古』で陶邑瓦窯跡資料として紹介されている瓦で、寄贈者によると平安時代後期のますえ畑瓦窯跡(真指定史跡、綾川町北山田西所在)の隣接地で見つかったっており、同窯跡で焼かれた可能性が高いと考えられます。瓦当の直径は9.7cmと小さく、八葉素弁蓮花文が見られます。瓦の文様の比較から、この窯跡で製作された瓦の一部は六波羅光寺などの京都の寺社に運ばれていたことがわかっています。今回寄贈された瓦を調査することによって、ますえ畑瓦窯跡での瓦生産の研究がより一層進められると思われま